

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名:ミケーラ ケリー (Michaela Kelly)

ミケーラ ケリー (Michaela Kelly) 氏の論文、“Contemporary Motherhood in Northern Japan: An Ethnography Applying Social Capital and Network Theories (東北における現代のマザーフッド: 社会関係資本とネットワーク理論を利用した民族誌)” は、社会的ネットワーク分析をベースとする創意に富んだデータ収集と社会関係資本論の批判的発展にもとづき、岩手県一戸町における、母親である女性たちが形成する人間関係とその様態ならびに動態に焦点を当てて、「母親になること」「母親であること」を複合的、立体的に考察したものである。

本論文は序章と本論をなす 7 章および結論で構成される。序章では、日本における少子化議論と対策、ならびに、その議論の一部として主張される「社会関係資本」と出生率との関係について、批判的に検討することの必要性が提示される。

本論の第 1 章、第 2 章では、本論文の背景説明のあと、先行研究文献の批判的検討がなされ、論文全体の理論的基盤が示される。第 1 章では、日本における少子化議論と対策を背景として、調査地岩手県一戸町の概要とケリー氏と調査地との関わりについて具体的な記述が行われる。第 2 章は、マザーフッド研究全般ならびに日本におけるマザーフッド研究、社会関係資本研究、人間関係に関する視座でもありデータ収集法でもある社会的ネットワーク分析など、人類学だけでなく、隣接する社会学、歴史学、社会心理学、政治学等、幅広い領域における文献、議論が批判的に吟味され、本論文の基軸となる理論的、方法論的観点が提示される。また、本論を展開するにあたり、中核となる母親たちの人間関係に関する社会的ネットワーク分析を活かしたデータ収集方法について説明が行われる。

続く第 3 章から第 5 章は、具体的な民族誌的記述を多く含みつつ、妊娠、出産(第 3 章)、乳児期(第 4 章)、2・3 歳の保育期(第 5 章)と、「母親になる」過程の身体的経験に沿った考察と議論が展開される。第 3 章では、母親になるに伴い変化する社会的関係、インフォーマントたちの感情、経験が、子を産む母親と著者との個人的関わりを通して克明かつ鮮明に力強く描き出されている。第 4 章では、社会関係資本の観点が導入され、母親にとって大きな意味をもつ三種類の人間関係(妻・夫、嫁・姑、「ママ友」同士)とその関係において交換される資源に関する考察が行われる。第 5 章は、「のびのび」という子育て支援センター(3 歳未満の子とその親が対象)を舞台に、そのセンターを利用している 8 人のインフォーマントたち相互の人間関係を社会的ネットワーク分析のアプローチから詳細に分析し、「ママ友」同士の、関係形成、資源交換、関係変容及び崩壊の動態が論じられる。

こうした緻密な民族誌的記述に基づく議論をもとに、第 6 章では、社会関係資本論を批判的に再検討し、本民族誌に即した独自の理論へと発展させる。社会関係資本を、エゴ中心ネットワークを基盤として、個々の対人関係を介した資源(①物質的、②参加的、③情動的、④精神的、⑤交際的、⑥共有的、⑦资格的)の交換が累積するシステムと定義する。さらに、エゴ中心ネットワークにおいて、個別の一对一関係だけではなく、家族、「ママ友」、友だち、近隣など、ある社会的集団のメンバーとして、互いの関係にもとづく役割として資源を交換することの重要性が指摘され、そうした社会的集団を“relational (role) community (関係的(役割)コミュニティ)”と規定した。そして、これらの概念装置にもとづき、主としてブルデューの資本理論を読み替えることで、「具体の社会関係資本」理論とでもいべき枠組を提示し、本民族誌の記述を理論的に解釈し、理解する有効な手立てとした。

本論の最後となる第 7 章は、女性たちのアイデンティティという観点から、社会的関係と交換される資源との関係を掘り下げた議論がなされる。その結果、関係的コミュニティを介した文化的実践により生まれる、エゴ自身とメンバーとしてのジレンマが浮き彫りとなり、女性たちが、

「本当の自分」を成立させようとし、資源を用いて、多様な役割をこなすと同時に自分を満たそうとする動態が描き出される。

本論文は、以下の三点において、文化人類学ならびに他学問領域・社会への貢献として重要である。第一に、現代日本社会における母親に関わる細密な民族誌的研究になっている点である。第二に、文化人類学では積極的な議論展開が乏しく、これまで、政治学、政策科学、社会学、経済学等で議論されてきた社会関係資本概念を、精緻な民族誌的研究に埋め込むことにより、批判的に発展させ、「具体の社会関係資本」理論といえる枠組みを用いた独自の理論へと展開していること。第三に、女性たちが結婚、妊娠し、子どもを産み、第二子以降を考える過程における社会的関係と資源の交換の重要性を明らかにすることで、少子化対策が立案、実施される地平との乖離を明確に指摘し、今後の母子にかかわる政策形成に多大な示唆を与えうる観点を提示したことである。

審査では、本論文が対象とする地域の固有性、議論を定位する位相について、日本研究など、本研究を時間的、空間的に位置づけるための文脈展開が乏しいこと、タイトルにマザーフッドとあるが、論文全体としては、子どもを持った「女性」のあり方に議論が傾いているようにみえること、などの指摘がなされた。また、人間関係、資源の類型、アイデンティティに関する議論における「役割」と「本当の自分」、「ママ友」関係における子どもの仲介者的役割など、議論で中核をなす数々の概念が、ときに静的で流動性を欠いており、議論展開が十分ではない、との意見も出された。

これについては、ケリー氏自身もそうした点の多くを明確に認識しつつも、それを完全には叙述に反映できなかった点があることも明らかになった。とはいえ、こうした点が本論文の持つ高い価値をいささかも損なうものではないことは、審査委員全員が認めるところであった。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文提出者は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。